

【論文】

太ももの「傷」

15世紀末イタリアにおける聖ロクス信仰の発展

河田淳

はじめに

「ペスト」——この言葉を耳にしたならば、18世紀までヨーロッパを中心に人びとを死へと至らしめた病のことをすぐさま思い浮かべるだろう。《死の勝利》や《死の舞踏》といった当時この病を主題として制作された図像からは、この病が老若男女、貴賤の別なく突然の死をもたらしていたことが見てとれる。

もともとペストはネズミなどの齧歯類のあいだで発生する病気で、これらの動物についたノミが人の血を吸うことで、菌が人体に侵入する。感染後まもなく、倦怠感や寒気に加え、高熱、頭痛、嘔吐に見舞われ、耳の裏や脇下、太ももの付け根などリンパ節が腫れ、激しい痛みで昼夜問わず悩まされるといった症状が出る。ペストに罹患したことをきっかけに敗血症や肺炎、髄膜炎などが引き起こされることもある。とりわけ患者の皮膚が黒ずむという症状から「黒死病」とも呼ばれていたことはよく知られている。これは適正な処置をしなければ数日以内に命を落とす病であり、医療技術が十分に発達していなかった時代には多くの人々がその犠牲となった。現代医学においてこの病は腺ペスト、敗血症ペスト、肺ペストに分類され、当時流行していたのは主に腺ペスト (bubonic plague) だとされ

ている*¹。しかし、当時の年代記者や文筆家が「ペスト」と記した病全てがそうだったとは言いきることはできない。かつての医学的知識では天然痘やチフス、梅毒といった伝染力が強く、致死率も高い病がペストと混同されることもあったからである。

ペストがヨーロッパで最初に流行したのは、皇帝ユスティニアヌス(在位 526-565年)が治める東ローマ帝国でのことだった。541年から始まったとされるペストの流行はやがて西ローマ帝国からブリテン島にまで及び、およそ200年の長きにわたった*²。のちに回復はしたものの皇帝自身も罹患したことから、この時期に流行したペストは「ユスティニアヌスのペスト」とも呼ばれている。その後、しばらくは息をひそめていたこの病が再び猛威を振るうことになったのは、中世ヨーロッパでのことだった。1347年10月、中央アジアからシチリア島のメッシーナに上陸したペストはヨーロッパ以北にも爆発的な勢いで伝播していった。以後、この病は周期的に流行を繰り返すこととなるが、人びとは治療法や感染拡大を食い止める方策をなかなか見つけ出せず、ジョヴァンニ・ボッカッチョ『デカメロン』やアレッサンドロ・マンゾーニ『いいなづけ』にも記されるように、街は荒廃から免れ得なかった。

中世ではペストが流行する原因が解明されていなかったため、この病は神が人間に与えた罰と恐れられていた。この病から逃れるためには神の怒りを解くしかないと考えた人々は、聖人に「仲裁者」としての役割を期待して祈りを捧げた。聖人は本来的に「人」であるため、祈りを捧げる者の心情をよく汲んでくれる存在だと捉えられていたからである。聖人信仰は地域や職業、団体に根差したものが多かった一方、そういったカテゴリーをこえて広範囲にわたる場合もあった。その代表的な例が本論で取り上げる聖ロクスへの信仰である(図1)。

ロクスは、15世紀から19世紀初めにかけてイタリア、フランス、ドイツを中心に信仰された聖人で、ペスト患者をはじめとする病人や巡礼者、墓掘り人夫を守護すると信じられてきた。ロクスが台頭する以前は、とりわけ聖母マリアやセバステアヌス、クリストフォロスが伝染病からの守護する聖人として初期キリスト教時代から信仰を集めていた。新参者であったロクスが15世紀半ばにはこうした聖人たちに匹敵するほどの人気を博していたことは、さまざまな伝記や造形作品、信徒会の数からうかがえる。ヴェネツィアにあるロクスに捧げられた大信徒会スクオーラ・グランデ・ディ・サン・ロッコによれば、その名を関する町や村はイタリアだけでも現在およそ30あり、教区は270区、教

.....
*¹ 肺ペストの場合、感染者の唾液の飛沫や痰にふくまれる菌を吸い込むことで感染が拡大する。ペストの諸症状について詳しくは以下を参照のこと。Boeckle, Christine M. *Images of Plague and Pestilence: Iconography and Iconology*, Truman State University Press: Kirksville, 2000.

*² Littel, Lester K. (ed), *Plague and the End of Antiquity: The Pandemic of 511-750*. New York: Cambridge University Press, 2006.

会にいたっては 3000 にものぼる*³。

先行研究では、聖人伝研究の側面からは信仰が定着した年代とその普及の過程が、美術史研究の側面からは図像学的な源泉とそれが成立した年代が問題となってきた。このような研究はロクスという人物が実在したことを大前提としていたが、歴史家ピエール・ボルは伝記をそのまま歴史的事実として受け止めることは留保しなくてはならないといみじくも指摘している*⁴。2004 年には、聖人史家アンドレ・ヴォシエはパドヴァでロクスに関する学術会議を開催し、この聖人が他の聖人の特徴やエピソードを借用してつくり上げられた、イメージの集合体であることを浮き彫りにした。また翌年には、ボルやパオロ・アスカーニが中心となり、各地に散らばるロクスに関する資料や論文の収集、研究を目的とした団体「イタリアにおける聖ロクス協会 (Associazione San Rocco Italia)」を設立し、その成果をホームページ上で公開するなど領域横断的なアプローチをとっている。同年にマサチューセッツ州ウースター美術館で開催された「希望と癒し：1500 - 1800 年におけるペスト流行期のイタリア絵画」展*⁵では、セバスティアヌスやカルロ・ボッロメオに並び、ロクスも中心的にとりあげられていたということも、この聖人の重要度を示している。

こうした研究を踏まえ、本論文ではロクスという聖人のイメージが生成され、発展していく過程を 15 世紀末までのイタリアの事例を中心に挙げながら明らかにする。以下では、まず、ロクスへの信仰が形づくられた時期を追う。次に、その代表的な聖人伝を分析することで、ロクスが先行する聖人のイメージをどのように踏まえて形づくられているのかという点にせまる。そして、ロクス像の一般的な特徴を示した上で、他のペストからの守護聖人像といかに共存したのかを示す。最後にロクス像の代表的な注文主であった信徒会が制作させた作品をとりあげ、制作の背景と機能を浮き彫りにする。この考察からは、ロクスという聖人の成立と信仰の発展に重層的なイメージがかかっていることが明らかになるだろう。

*³ Vauchez, André. "San Rocco : tradizioni agiografiche e storia del culto", in Carlo Bertelli (et al.), *San Rocco nell'arte : un pellegrino sulla Via Francigena*, Electa : Milano, 2000, pp.13-19.

*⁴ ロクスに関する研究史については以下が詳しい。Bolle, Pierre. "Saint Roch, Une Question de Méthodologie", *San Rocco: Genesi e prima espansione di un culto Incontro di studio-Padova, 12-13 febbraio 2004*, Société des Bollandistes; Bruxelles, 2006, pp.9-56.

*⁵ 「希望と癒し：1500 - 1800 年におけるペスト流行期のイタリア絵画 "Hope and Healing. Painting in Italy in a time of plague, 1500 - 1800"」展はマサチューセッツ州ウースター美術館で 2005 年 4 月 3 日から 9 月 25 日にかけて開催された。

ロクス信仰の成立時期と聖人伝

ロクスの生涯と奇蹟をしるした聖人伝は、15世紀から16世紀にかけて数多く生み出され、インクナブラとして出版されたあと、マニスクリプトとしても制作され、流布した。イタリア語、フランス語やドイツ語などでも出版されたが、なかでも、版を重ねたのはラテン語で記された聖人伝である。これは、ヴォシェが指摘するように、ロクスが聖人として確立されるために公的な言葉であるラテン語で記される必要があったためだと考えられる*⁶。それぞれの地域の俗語でも出版されたことは、ラテン語を読める人びとに留まらず、より広い読者層を対象としてことを示している。まずミラノ、ついでヴェネツィアとイタリア北部、そしてドイツ、フランスへと拡大する聖人伝の出版地と年代に、ロクス信仰の地理的・時代的な拡大を重ねてみることもできる(表)。

さまざまな聖人伝を比較すると、生地についてはモンペリエで一致しているものの、没地については南フランスの一地方、北イタリアにあるマッジョーレ湖の東にあるアンゲーラ、北イタリアからドイツに向かう途上、ドイツの一地方と一致せず、ヴァリエーションに富んでいる。ロクスの聖遺物が現在のフランスからポー川流域の北イタリアを中心にスイス、ドイツといった広範囲な地域で残ると伝えられる背景には、没地が不確かであることが関わっている。

まずは聖人伝に共通する点からその生涯を浮き彫りにしてみよう。

モンペリエ*⁷に生まれたロクスは若くして両親を亡くした後、財産を放棄し、ローマ巡礼の旅に出る。道すがら立ち寄ったアックアペンデンテやチェゼーナなどの街でペスト患者の看病に献身した。ローマでも、ペストに罹った枢機卿を救い、このことがきっかけとなり、教皇と謁見したとされている。その三年後、帰途についたロクスはピアチェンツァの街でついにペストに罹ってしまう。ロクスは人里を離れた森のなかに庵を結び、身を隠したところ、喉の渇きに苦しめば奇跡的に泉が湧き、空腹を覚えれば犬がパンを運んできたという。その後、ロクスは日々パンをくわえて出かける飼い犬の行動を不思議に思い、その後をつけてきた同地の貴族ゴットアルドによって発見される。ゴットアルドの助けもあって無事に回復したロクスは、旅を再開したが、ある土地でその風体が怪しまれて投獄されてしまう。その五年後、獄中で息をひきとったロクスの遺体の周りでは数々の奇跡的な現象が起こる。同地の統治者が確認したところ、血縁関係があることが判明したため、ロクスは教会に手厚く葬られたという。

*⁶ Vauchez, *op. cit.*, 2000, pp.14-16.

*⁷ モンペリエはサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路に位置する街。アラゴン王国やマヨルカ王国によって統治された後、1349年にフランスへ併合された。

以上のような筋書きが聖人伝の骨格となっている。数ある聖人伝のなかでも特に影響力をもったのは、1479年にフランチェスコ・ディエドが記した『聖ロクス伝 Vita Sancti Rochi』と、15世紀後半に出版された逸名の伝記者による『略伝 Acta Breviora』である。この二作品は、1737年にボランディストによって編集され、出版された『聖人行伝』のなかにも収められているものである。この二作品を比べると、ディエドの聖人伝は人文主義者の修辭に彩られている一方で、『略伝』はその名のとおり聖人の生涯の出来事を簡潔にたどった筋書きであることがわかる。とりわけ、ディエドの聖人伝は初版から18年間にミラノをはじめ、ヴェネツィアやニュルンベルク、マインツ、パリで出版されており、その後、各地で執筆された伝記のモデルとなった。ミラノで出版された版はフランチジェーナ街道などの陸路を伝ってフランスへ、ヴェネツィアで出版された版は海路を伝ってドイツ方面へ伝播していったものと考えられている。

このディエドとは、どのような人物で、何を目的としてロクスの聖人伝を記したのだろうか。自伝においてディエドは、1433年にヴェネツィア貴族の家に生まれたのち、パドヴァ大学で哲学と法律を学び、人文主義者となったと記している。1460年代からはヴェネツィアの外交官として各地に赴きつつ、ボッカッチョ『デカメロン』の一部やイソクラテス『平和について』をラテン語に翻訳するなど、人文主義者としても活動していた。1470年代にはベルガモやラヴェンナで行政官を務め、1478年にはヴェネツィア領であったプレーシャ総督に就任した。しかし、そこでは「2万もの人びとを死に至らしめた」といわれるほどのペストが流行していたため、ディエドは災禍から逃れるためにサロというガルダ湖畔の街に身を寄せた。この時に著されたのが、『聖ロクス伝』である。この伝記が出版されたのは、ディエドがヴェネツィアの特使としてミラノに滞在していたときのことだった*⁸。

ディエドは伝記の序文で、執筆の目的を次のように述べている。

これから記そうとしているロクスについて、わたしたちは古く、聖なる書物に何ひとつ確かなことを見いだしていない。しかしながら、このうえなく聖なるものの血筋、巡礼、生涯を闇のなかに留めておいてはならない。そのために異国の断片や粗雑で無骨な俗語で書かれた韻律や詩句を集めた……*⁹

*⁸ Ascagni. *op.cit.*, pp.33-34.

*⁹ Diedo. Francesco, *La Vita de Sancto Rocco*, Milano, Simon Magniacus, 1479, 4, 20 fol., 25 linee, tip. I:99 R Museo di Chantilly. Copinger n. 1974. BMC VI 760. IA 26 598: "Benche de Rocho la vita del quale siemo per scrivere niuna cosa certa habiamo trovato neli antiqui et sacri libri, niente di meno azio che la generatione progenie la peregrinatione la vita et morte de questo sanctissimo homo non rimanga in obscuro..."

このくだりは、ロクスに関する何らかの記述は以前から存在していたものの、体系的にまとめられてなかったことを示している。ディエドは続けてプレーシャ市民にむけて、ロクスの執り成しによってペストから救われるためには、三つの事を誓うよう薦めている。まず、ロクスについての正しい知識を持つこと。次に、ロクスに捧げた教会や聖堂を建てること。そして、ロクスの生涯を記して残すこと。ここに、ディエドによる聖人伝は、単にロクスの生涯を記録するためだけのものなのではなく、ペストの終息を祈念して執筆されたものでもあったことが記されている。

ディエドの聖人伝は、先に述べた基本的なエピソードを核に、聖書や他の聖人伝にみられるトポスから構成されている。それは、先行する伝統的なエピソードを下敷きにすることで新たな聖人の聖性を伝統によって補強するという、一般的に用いられてきた手法であり、ここに伝統的語りと当世的な状況に交差点を見出すことができる。

まず、出生のくだりでは、ディエドは「その敬虔さと信仰ゆえに、神は年老いたエリザベツとザカリアに洗礼者ヨハネをもたらしたように」、ロクスをその両親のもとにもたらしたと記している*¹⁰。「天使から子どもを授かることを告げられる」という点は読者に受胎告知を思い起こさせただろうことは既に指摘されている通りである。*¹¹ また、その両親が「長いあいだ、子どもを授かることのなかった敬虔な夫婦」であるという点は、ロクスを『ルカによる福音書』第1章1-80節に記されている洗礼者ヨハネの出生と関係づけようとしたと考えられるものであり、神的な介入をもってこの聖人が生を受けたことを強調している。

聖性のあかしとして赤い十字架のかたちをした痣が胸に刻まれていたことやローマ巡礼の旅出ちに際して財産を放棄し、貧しいものへと分け与えたということはアッシジのフランチェスコを彷彿とさせたにちがいない。12世紀から13世紀にかけて活躍し、列聖されたフランチェスコは、先行する聖人のなかでも人々にとって極めてアクチュアルで、イメージを喚起しやすい存在であったといえる。フランチェスコ自身もローマに巡礼し、レプラ患者を癒すキリストをまねび、施療院で患者の介護に献身していたこと点も、ロクスが巡礼の道すがら立ち寄った街でペスト患者のいる病院や家々を訪ね、癒したというエピソードに反映されていると考えられる。

また、ロクスはピアチェンツァの街で天使からペストに苦しむことになるという宣告を受けるが、このエピソードは、あたかもオリーブ山のキリストのようだと美術史家エミ

*¹⁰ *Ibid*, "Ma nui imitatori de la sacrosancta ecclesia romana existimemo Rocho esser generato come Zoanne evangelista de elisabeth & Zacharia equali decrepiti cussi permirendo idio per lor bonta e fede verso lui credemo zoanne evangelista esser nasciudo..."

*¹¹ Vaslef, Irene, *The role of St. Roch as a plague saint: a late medieval hagiographic tradition*, Thesis of Ph. D., Catholic University of America, 1984, p. 104.

ール・マールは指摘している*¹²。ペストに罹患したロクスが森に庵を結び、神に祈りを捧げるやいなや、泉がわき出で、彼の渴きを癒したというくだりは『出エジプト記』第17章1-7節の砂漠をさまようモーセが水を得たエピソードと、庵でペストの症状に耐えるロクスのもとに犬がパンをくわえて運んでくるくだりは『列王記上』17章2-7節の荒野でエリヤが鳥によって養われていたエピソードと構造的に類似している。重要な預言者であるモーセやエリヤ、そして洗礼者ヨハネのエピソードを折々に挿入することで、ディエドはペストが流行する世を「キリスト教的な荒野」として例え、そのなかで理想的な信徒としてロクスが生きていたことをアピールしているのである。

このようにロクスの生涯が他の聖人のもつイメージの断片から練り上げられた背景には、彼が後世に生み出された聖人であるからこそ、読むものを納得させる「信憑性」と「聖性」を必要としていたからだと考えられる。

一方で、ロクスは先行する聖人とは一線を画する特徴を持つからこそ、急速に浸透していったともいえる。そして、その点こそが人びとが必要とし、模範としようとしたものであったのではないだろうか。つまり、ロクスの聖人としての特徴は単に伝統的なトポスを焼き直したところのみあるのではないことを、次章で明らかにする。

ロクスのイコノグラフィー：「患者」としての側面

ロクスの生没年について、ディエドは1295年から1327年までと記しているが、ピエモンテの司祭アントニオ・マウリーノ*¹³は1345年から1376年に絞られると主張している。ロクスがローマに滞在していたのはウルバヌス5世がローマに教皇庁を移した1367年以後の三年間に限られる点と、30歳前後でなくなったとされる点から、ロクスの生没年を導き出したのである。その上で、ロクスがローマで出会った枢機卿は、ウルバヌス五世の兄弟であったアンジェリック・グリモアールだったという。一方でアゴスティーノ・フリッケは、13世紀から14世紀にモンペリエを統治していたログという名の一族とロクスを結びつけて考え、1350年から1378年ごろまで生きた人物であると結論づけた*¹⁴。こうしたロクスの実在を前提とした研究がなされる一方、ヴォシェは生没年の問題は信仰の起源を探る一つの指標として捉えるにとどまっている*¹⁵。本論もヴォシェと立

*¹² エミール・マール『中世末期の図像学(上)』田中仁彦他訳、国書刊行会、2000年、261-267頁。

*¹³ Maurino, Antonio, *San Rocco di Montpellier*, Confronti storici: Torino, 1936, pp.106-107.

*¹⁴ Fliche, Agostino, "Le problème de Saint Roch", in *Analecta bollandiana*, LXVIII, Société des Bollandistes: Bruxelles, 1950, II, pp. 343-361.

*¹⁵ Vauchez, *op. cit.*, 2000, pp.13-14.

場を同じくするが、補足するなら、おそらく1347年以後のペスト流行期の早い段階に、ロクスという聖人の核となる人物やエピソード群が存在していたといえるのではないだろうか。

信仰の最も古い史料は、ヴォゲーラ^{*16}で1389年に制作され、1391年2月25日にジャンガレアツォ・ヴィスコンティに認可された『市民法ならびに刑法』に収録された祝祭録に、1382年にロクスの祝祭が記録されている(図2)。ただ、その前後の年代や周辺都市には、ロクスの祝祭の記録は残っていない。聖人伝に記される信仰の起源は古ければ古いほど正統性があるものとみなされたことから、この記録も後に制作された文書である可能性は否めないだろう。さらに、1414年にコンスタンツで公会議が開催されていた折に同地でペストが勃発し、ある枢機卿がピアチェンツァからロクスが描かれた幟旗を運ばせ、盛大な祈願行列を行ったとディエドは記している。^{*17}

また、当時、聖遺物は所有しているだけで聖人とより強い繋がりを持って、その恩恵に与るとされていたため、人びとはこれを熱狂的に手に入れようとしていた。では、ロクスの聖遺物が信仰の対象として登場するのは、いつごろのことであろうか。

ロクスの聖遺物はフランス^{*18}やスペインにも散見されるが最も有名なものは、ヴェネツィアのロクス教会に納められているものである。1477年から1479年にかけてのペストの流行をきっかけに結成されたスクオーラ・ピッコラ・ディ・サン・ロッコの会員がヴォゲーラにあったロクスの聖遺物を手に入れ、ヴェネツィアへと奉遷したのは1485年のことだった。一説にはカマルドリ会士のマウロというものがヴォゲーラ伯の城から盗み出したとも、ヴォゲーラの聖堂参事会長の同意を得て購入したとも言われている^{*19}。盛大な行列でもってヴェネツィアへ運び込まれるやいなや、この聖遺物は10人委員会によって真正性が承認されたという。こうしたスムーズな事の成り行きには、1479年にディエドが聖人伝を出版していることや、1484年にヴェネツィアでペストが流行していたことも一役買っている。

信仰の起源を歴史学的に正確に同定することは困難ではあるが、ロクスは14世紀中ごろから後半に生きた人物として著される傾向があり、その信仰はおおよそ14世紀後半から15世紀初めにかけて根付き、その後、一世紀のあいだに急速に発展したものだたと

*16 没地の候補地でもあるピアチェンツァの西50キロの街。

*17 イレーネ・ヴェスレフによれば、ディエドはフェラーラおよびフィレンツェの公会議と取り間違えているという。Vaslef, *op.cit.*, 1984, p.145.

*18 ロクスはモンパリエで死去し、その遺体はドメニコ会の教会に納められていたという説もある。1399年には、時の総督がアルルの聖三位一体修道会に聖遺物を移すが、17世紀に入ってその一部がモンパリエへと返還されたとも伝えられている：Vaslef, *op. cit.*, p.147.

*19 Tonon. Franco, *Scuola dei battuti di San Rocco: Documenti sulle origini e illustrazione dei Capitoli delle Mariegole*, Quaderni della Scuola grande Arciconfraternita di San Rocco ; Venezia, 1998, pp.27-31.

いえる。すでに述べてきたように、ロクスにまつわる言説が聖人伝というかたちに体系化されたのは15世紀末のことだったが、その図像も、まさにこの時期から盛んに制作されるようになった。

『イリアス』冒頭でも記されているように、古典古代において疫病は「天から降り注ぐ矢」として表され、ユダヤ・キリスト教の文脈においても神罰たる疫病の象徴は矢もしくは剣や槍などの刃のある武器として表されていた^{*20}。疫病を前にした人びとは、「仲裁者」たる聖人を描いた板絵や彫像などを制作し、祈りをささげることで危機的状況を打開しようとしていた。590年にローマをペストが襲った際には、時の教皇グレゴリウス1世は行列を組み、聖ルカが描いたとされる聖母子の板絵を掲げ、町中を練り歩いた。「天から矢が飛来するのが肉眼で見えた」と、ヤコブス・デ・ウォラギネはペストの到来を劇的に語っている。最終的には、聖天使城にまで来た教皇は、血の滴る剣を鞘に納める天使の姿を目にし、疫病の終息を知ったという(図3)^{*21}。また、6世紀頃からは、キリストや聖母マリアに加え、他の殉教聖人にもペストを退ける効果があると見なされ、信仰されるようになっていった。

伝統的に、「仲裁者」たる聖人たちが、怒れる神やキリストにたいして、みずからの受難の証を指し示しながら、人間の許しを請う姿は表わされてきた。ロレンツォ・モナコが1402年以前にフィレンツェで制作した作品(図4)では、まず聖母が乳房とその足元にひざまずく8人の人間を示しつつ、キリストに向かって「この上なく親愛なる息子よ、貴方に含ませたこの乳に免じて、彼らに慈悲を^{*22}」と訴える。これを受けてキリストは脇腹の傷を指差しながら、神に向かって「父なる神よ、貴方がわたしに望んだ受難に免じて、彼らに赦しを^{*23}」と執り成している。画面上部の神は、この嘆願に応答するかのように聖霊たる鳩をキリストへと向かわせる構図が取られている。このように注文主は、みずからと関係の深い守護聖人を適宜組み合わせ、執り成しの層を幾重にも張り巡らせた祈念画を制作させることで、強力な護符のような効果を期待していたのだった。

ペスト流行後は、以前から存在していた執り成し図像は部分的に変更され、ペストに対しても効果のあるものにされた^{*24}。ペストを寓意的に表わした絵画作品では、一般的に、

*20 『詩篇』第37章2-4節：詳しくは以下を参照のこと。Boeckl, *op. cit.*, pp.33-44.

*21 ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説1』前田敬作・今村孝訳、平凡社、2006年、475 - 478頁。

*22 聖母の口から発せられている金文字については以下の通り：FIGLIUOLO PELLAC: / TE CHIO TIDIE ABBI MIA DI CHOSTORO

*23 キリストの口から発せられている金文字については以下の通り：PADRE MIO SIENO SALVI CHOSTORO PEQUALI TU / VOLESTI CHIO PATISSI PASSIONE

*24 ペストを機に作り変えられた図像のひとつとして《慈悲の聖母》があげられる。詳しくは、河田淳「ペスト流行期の慈悲：——《慈悲の聖母》のイコノロジー——」『人間・環境学』京都大学大学院人間環境学研究科、2011年、27-38頁。

神やその周りを取り巻く天使たち、死の擬人像が画面下部に描かれた人間たちに向かってペストの矢や槍を降らせる場面が描かれる*²⁵。ペストからの守護聖人たちは、ただその場に立ち合うこともあれば、暗示的に、その矢の雨を人々の代わりに受けるような姿で表されることもあった。

ロクスが図像として表わされる際には、常にマントやゲートル、つばの広い帽子を身につけ、巡礼杖をもった旅装束をまとい、作品によっては帆立の貝殻、水をいれたひょうたん、背負い袋をもった姿で登場する(図5)。このような巡礼者を示すアトリビュートは、大ヤコブの図像表現とも共通するものだったが、両者を決定的に分かつのは、その太ももにペスト痕が刻まれているのか否かということだった。どちらの足にペスト痕があるかは明確に定められてはおらず、画面上の配置に応じて、観者にアピールしやすい足に描かれていることが多い。ペストの発症と回復を天使が知らせにきたと聖人伝が記しているように、ロクスに与えられたペストは神からの罰ではなく試練として描かれていることから、このペスト痕は受難の象徴としても読むことができる。キリストが神へと人びとを執り成す時に、そのわき腹に刻まれた傷を示すように、ロクスは神やキリストへとみずからの太ももに刻まれた傷を見せることで執り成しを行っているのである。また、必ず描かれていたわけではなかったが、ペストの発症と回復を知らせる天使や森に潜むパンを運んでくる犬も重要なアトリビュートである。

ロクスは単身像として描かれるよりも、他のペストから人びとを守るとされた聖人と並んで幟旗や祭壇画に描かれることが多かった。ベノッツォ・ゴッツォリが1481年にピサで制作した作品(図6)では、画面背景全体に描かれたピサの街を今まさに天使たちがペストの矢でもって襲おうという瞬間が表されている。画面前景には、トレンティーノのニコラウス、ロクス、セバスティアヌス、シエナのベルナルディーノの四聖人が描かれ、寄進者の夫婦がその足元に跪いている姿が小さく描きこまれている。前景と背景を隔てる縁の部分には銘があり、ピサの一市民が「ペストから守護者たる四人の聖人」を注文した旨が刻み込んである*²⁶。シエナのベルナルディーノの開いた本には、「父なる神よ、私は御名を全ての人びとへと伝えました。情け深い神よ、どうか憐れみを与えたまえ」という祈禱文が書き記されている。画面中央で瓜二つの姿で鏡合わせになるように描かれている

*²⁵ ペストの擬人像はチェーザレ・リーパが『イコノロジーア』に記すまで登場することはなく、挿絵として絵画化されるのは18世紀に出版された版がはじめてのことであった。

*²⁶ Ahl, D. C. *Benozzo Gozzoli*. New Haven, 1996, pp. 189, 233, 237, 239, no. 47, pl. 244: 四聖人の背後にある銘: QVESTI IIII-SANTI D IFENSORI / DELLA PESTILENTIA A FATTFARE / PIETRO DIBATISTA DA RIGO DIM INOE / CITADINO PISANO-M. CCCC-LXX XI-SANTVS NICHOLAVS DETOLENTINO;-SANCTVS ROCHVS;-SANCTVS SEBASTIANVS;-SANTVS BERNARDINVS; ベルナルディーノの開いた本の銘: PATER M / ANIFES / TAVI N / OMENT / VVM O / MNIB / VS- []E / []FA[] / MI[SERICORDI]AM T / VA[M] NOB / IS DOMI / NE CLE / MENTE / [] OSTE / NDE []

のが、ロクスとセバスティアヌスである。

そもそも、セバスティアヌスやクリストフォロスがペストからの守護聖人とみなされ、信仰をあつめたことには、彼らが異教徒から矢で射られても絶命しなかったというエピソードが関係している。ペストも矢として表わされるため、彼らは「免疫」があると読みかえられたのだった。一方で、ロクスはメタファーではなく、ペストそのものと関わりがある。一つめにはローマ巡礼の道行きでペストの患者たちを癒して回ったということ、二つめにはロクス自身もペストにかかりつつも最終的には回復したということが挙げられる。これは、セバスティアヌスやクリストフォロスに比べて、ロクスがペストの流行した後に生まれているからこその特権的な特徴だといえる。すなわち、ロクスは「治療者」でもあり「患者」でもあるのだ。

ロクスのペスト痕は「患者」であったことの証拠でもあり、本来なら、太ももの付け根やわきの下といったリンパ節の部分にできるものだったが、造形作品としては太もものなかごろに表わされたものが多かった。さらに、ペスト痕があるとはいえ、ロクスは高熱や激痛にうなされ、黒いあざが全身に浮き上がることもなく、苦痛も感じていないように描かれている。ピアチェンツァにのこるゴットアルドが生前のロクスを描いた「肖像画」として残る最初期の作品(図7)でも——現在では早くとも14世紀後半されるものだが——、ロクスは平然とした姿で表わされている。美術史家ルイス・マーシャルは、ペスト患者らしからぬ健康的なロクスの姿は、「回復を約束されたイメージ」であり、人びとのうちにあるペストに対する不安感をぬぐい、勇気づけるものであったと述べている^{*27}。歴史学者エリザベス・カルパンティエが「ペストは繰り返されるからこそ重要なのであって、人びとは悲観的に受け身だったのではなく、積極的にペストに対して策を講じたに違いない」と述べたことを踏まえ、マーシャルはロクスという聖人がその一策として創り出されたと主張しているのである。

たしかに作品のなかには、その太もものペスト痕を外科手術的に癒そうとしている天使も見られ、ロクスの回復は予め定められていたことは確かである。少し時代が下るがモレット・ダ・ブレーシャの作品(図8)では、安らかに眠るロクスに天使がそっと近づき、外科手術を行い、膿を全て出したかのようなペスト痕に軟膏のようなものを塗って癒している場面が描かれている。長時間効く麻酔薬が存在しなかった時代に、このように痛みを伴わない神的な手術は人びとにとって理想的であっただろう^{*28}。先行するペストからの守

* 27 Marshall, L. "Confraternity and Community: Mobilizing the Sacred in Time of Plague", *Confraternities and the visual arts in Renaissance Italy : ritual, spectacle, image*, Wisch, Barbara (et al.), Cambridge University Press; Cambridge & New York, 2000, pp.30-33.

* 28 Worcester. Thomas, "Saint Roch vs. Plague, Famine, and Fear" in *Hope and Healing: Painting in Italy in a Time of Plague, 1500-1800.*, Gauvin Alexander Bailey et al., University of Chicago Press: Chicago, 2005, p.157.

護聖人とは違い、ロクスはまさにペストをその身でもって引き受け、回復したという証が太もものペスト痕なのである。

このペスト痕は時代が下るにしたがって、医学的には誤った表現であるものの、太もものなかごろに描かれるか、徐々に衣服の裾の暗がりにはじめかされることが多くなっていった。しかし、当時の人びとにとってはペスト痕がみえずとも、衣服の裾をあげ、太ももをあらわにしている聖人像を目にしただけで、その人物が誰であるかを容易に判別できずに違いがない。

信徒会とロクス：「治療者」としての側面

こうしたロクス像は15世紀後半から16世紀初めにかけて、北中部イタリアを中心として制作された。とりわけ、ヴェネツィアに3万人もの死者をもたらした1477年から1479年にかけてのペストが、テキストの執筆だけでなく造形作品の制作を後押ししていた。俗人の男女から構成された信徒会が注文主となることも多く、会員たちはロクス像をかかげながら、みずからを鞭打ちながら都市を練り歩くこともあった。会員たちは貧民、孤児、寡婦を援助したり、行き倒れたものを施療院へと連れて行ったり、死者を埋葬したりする慈善行為が義務付けられていたが、それは、こうした行為を通して死後の救済を確かなものとしようとしていたからだった。

まず、ヴェネツィアの大信徒会スクオーラ・ディ・サン・ロッコが制作したロクス像に着目したい。ヤコポ・ティントレットの巨大な連作が完成していなかった15世紀末、このスクオーラにはある木彫像と祭壇画が安置されていた。この作品は1583-85年のあいだに撤去され、現在では散逸してしまっていたが、1581年にサンソヴィーノが素描を残している。美術史家ピーター・ハンフリーによれば、ドレスデンに残るアントネッロ・ダ・メッシーナのセバスティアヌス像(図9)が左翼に、アントネッロの息子ヤコベッロが制作したクリストフォロス像が右翼に描かれ、その中心には木彫像のロクスが据えられていたという^{*29}。ロクス像の制作年代については未だ明らかとなっていないが、この像がヴェネツィアで制作された最初期のロクス像であることは間違いないとハンフリーは述べている。左右の絵画パネルに関しては、アントネッロがヴェネツィアに滞在していたとされる1475-76年のあいだ、もしくはそれ以後に制作され、木彫像とともに現在の祭壇画のかたちに配置されたと考えられている。彫刻と絵画が組み合わされた作品の場合は、彫刻部が行列の際に担ぎ出されて用いられる場合もあったことから、この木彫像にも同じ様

*29 Humfrey, Peter, "Competitive Devotions: The Venetian Scuole Piccole as Donors of Alterpieces", *The Art Bulletin*, New York, LXX, 1988, pp 401-423.

な用途があったと考えられる。

ほぼ同時期のヴェネト地方で、このスクオーラ以外の信徒会が所有していたロクス像としては、アンドレア・ダ・ムラーノの作品(図10)やバルトロメオ・ヴィヴァリーニの作品(図11)があげられる。アンドレアとヴィヴァリーニは共同して作品にとりくむこともあったため、相互に影響関係にあったとも考えられる。1478年ごろに描かれたとされるアンドレアの祭壇画は完成当時、故郷ムラーノ島のサン・ピエトロ・マルティーレ教会にあったもので、中央にはビセンテ・フェレルとロクス、画面右側にはセバ스티アヌス、画面左側には殉教者ピエトロ、ルネッタには慈悲の聖母、ルイ、ドメニクス、トレンティーノのニコラウス、シエナのカタリナが描かれている。巡礼者姿のロクスはゲートルをたくし上げ、画面中央で跪く女性にペスト痕を見せている姿であらわされている。そのペスト痕は切り開かれていることから、すでに外科的な手術が済まされており、病状は快方が向かっていることが暗示されている。本作品が制作されたのは、まさにペストが流行していた時期やディエドの聖人伝が執筆され、出版された時期と重なる。注文主は、あらゆるペストからの守護聖人をこの絵に描きこませている。この作品で特徴的な点は、ロクスが教会の守護聖人である殉教者ピエトロと並んで中央パネルにひと際大きく描かれているということである。聖人の配置からは、ロクス像が伝統的な聖人像を排除するのではなく共存しつつも、徐々に台頭していったさまが見て取れるのである。

さらには、ロクスの名前を冠していない信徒会でも、ロクス像を積極的に注文、制作していた。1480年、アレツォでは慈悲の聖母信徒会は集会場に飾るための大きな板絵をバルトロメオ・デッラ・ガッタ^{*30}に注文したが、そこには団体の守護聖人であるマリアを差し置いて巨大なロクス像が表わされていた。この団体は、1257年にドメニコ会が主体となって、聖母への信仰を目的として設立されたもので、14世紀ごろにはアレツォのほぼ全市民を信徒会のメンバーとし、その拠点を町の中心部にあるグランデ広場に定めた。信徒会は会員からの寄付と遺贈で、低金利の融資施設モンテ・ディ・ピエタや五ヶ所の小規模の施療院のほか、病人と捨て子の施療院「サンタ・マリア・デル・ポンテ」、レプラ患者の収容施設「福者ラザロの家」、貧者と巡礼者のための施療院「サン・ロレンティーノ」施療院も運営していた。この団体もまた都市の生と死に深く関わっていた^{*31}。

.....
*30 同地で生まれ育ったジョルジョ・ヴァザーリが記した『芸術家列伝』によれば、バルトロメオは短期間のうちに、アレツォで三作品も制作したという。ヴァザーリ自身も、1527-31年にかけて7作品のロクス像を制作している。Giorgio Vasari, "Don Bartolomeo abate di San Cremente", *Le vite de' più eccellenti architetti, pittori, et scultori italiani, da Cimabue insino a' tempi nostri. Nell'edizione per i tipi di Lorenzo Torrentino, Firenze 1550*, (a cura di) Luciano Bellosi e Aldo Rossi, Einaudi, Torino 1986, pp.452-457.

*31 アレツォの街と信徒会活動については、以下を参照のこと。甲斐教行『フェデリコ・パロッチとカッブチーノ会—慈愛の薔薇と祈りのヴィジョン』ありな書房、2006年。

バルトロメオ・デッラ・ガッタにロクス像を注文する以前に信徒会が注文した作品としては、パトリ・ディ・スピネッコによる《慈悲の聖母と聖ロレンティヌス、聖ペルゲンティヌス》(図12)と《慈悲の聖母と聖ドナートゥス、福者グレゴリウス》と、ベルナルド・ロッセリーノによる《慈悲の聖母と聖ロレンティヌス、聖ペルゲンティヌス》といった、「慈悲の聖母」図像が主であった。この図像は広げたマントのしたに人々を迎え入れ、神によるペストの矢をはじき返すという表現をとることで、ペストを退ける機能がある図像として捉えられていたからである。

一方、バルトロメオ・デッラ・ガッタのロクス像は、グランデ広場に面した信徒会本部の「応接間」に飾るために注文された(図13)。この場所は、司祭たちが市民たちから意見を聞く場として毎週、用いられていた。その部屋を訪れたものは、この215cm×115cmの巨大な作品から少なからぬインパクトを受けたにちがいない。では、なぜ作品の前景を占めるのが団体の守護聖人である《慈悲の聖母》図像ではなく、ロクスだったのだろうか。

作品は巡礼者姿のロクスは団体の拠点があるグランデ広場に立ち、足元に転がる大きな石の上を踏み、その足のペスト痕を観者へと見せている。ロクスの巡礼杖に結び付けられた巻紙には、金文字で「人々のために祈る ora pro populo」という言葉が刻まれている。手を合わせてロクスが視線を向ける先には、二人の天使を伴って、この団体の守護聖人であるマリアがマントを広げて宙に浮いている。このマリアは、ロッセリーノが団体本邸のファサードに制作した《慈悲の聖母》があたかも顕現しているようだ。バルトロメオは聖母がロクスの願いに耳をかたむけるために出現した、奇蹟的な瞬間を描き出しているのである。本部の入り口には二人の着飾った男と、二人の墓堀人夫がおそらくはこちらを向いて立っている。墓堀人夫は社会的に必要でありつつも、ペスト流行期には危険が伴うために忌避される、宙づりの状態にある存在でもあった。死者を埋葬することは団体の重要な仕事の一つであったことは既に述べたとおりで、本作品ではマリアの庇護が彼らにも向けられていることが示されているのである。

作品が注文された1480年は、街を荒廃させるペストが続いていたときでもあり、ペスト患者への対応はより一層急務であったため、信徒会自体が都市において欠かせない存在となっていただろう。ロクスは、ペストに罹った患者に対してどのように対応すべきなのかという、現実の生活での理想的な態度を観るものに体現している存在でもあったのだ。ペストの流行が繰り返されるなかで、ロクスの「治療者」としての側面は信徒たちの模範になっていた。聖遺物もなければ、聖人が立ち寄った伝説もない一都市でもロクスは信仰を集めていたのである。

おわりに

患者でもあり、治療者でもあるロクス。その身をもってペストという試練を克服したロクスの姿は人びとに平癒への希望を与え、いかに生きるかのモデルケースとしても機能していたのだ。キリストに倣い、慈悲の業を実践するロクスは、世俗中心の慈善行為が称揚されるようになった時代の申し子だったともいえるだろう。

その信仰の発展と拡大には、交通と商業の要所ヴェネツィアという都市を抜きには語れない。もっとも影響力をもった聖人伝の著者ディエドもこの都市の外交官であった。同地にはドイツやフランドルといった様々な国の商館があり、国内外から絶えず文化がもたらされ、発信されていた。ペストが人の移動とともにイタリアに留まらずアルプス山脈を越え、各地へ伝播していったように、ロクスも絵画・彫刻作品や聖人伝といった媒体を通して地域を超え、広く認知されていったのだった。

こうしてロクスは人々のあいだに根付いてゆき、その名は教皇庁の列聖なしに「聖人」の冠を戴き、造形作品でも光臨とともに描かれるようになる。追認されるかたちで教皇ベネディクト 14 世 (1740-1758 年) によってロクスが正式に聖人と認められるようになるのは、18 世紀半ばごろのことである。

民衆が主導する信仰を黙認していた教皇庁だったが、14 - 15 世紀にかけて無尽蔵に増えていった聖人に対し、やがて危機感を覚え始める。1590 年 7 月、ヴェネツィアの大使がドージェに向けて教皇庁がロクスの生涯と奇跡を記した公式の記録を必要としているという報告をしている。というのも、シクストゥス 5 世がロクスを列聖するべきか否かを逡巡していたからだという。しかし、これに対し、ある枢機卿は人びとから「聖人」として広く信仰を受けているロクスを否定することになれば大きなスキャンダルとなるだろうと答えている^{* 32}。その後、教皇がすぐにこの世を去ったこともあって、この問題はうやむやのままとなり、ロクスが「聖人」の列から外されることはなかった。

19 世紀には、ペストの流行も下火となり、人々の恐怖の対象はコレラへと移っていった。ロクスはこの変化に対応してコレラに対しても守備範囲を広げることで、忘れ去られるどころか新たに信仰を集め続けた。近年、高病原性鳥インフルエンザがアジアで流行した際には、故郷モンペリエではロクスの死亡者を追悼し、終息を祈願するミサが捧げられた。時代の要請に柔軟に対応するロクスは、今やペストにとどまらず、あらゆる疫病から人びとを守護する聖人として活躍しているのである。

* 32 Vaslef, *op.cit.*, pp. 140-144.

図版



図1
カルロ・クリヴェッリ《ロクス》1493年頃、
板絵、40 x 12 cm、
ウォレス・コレクション、ロンドン

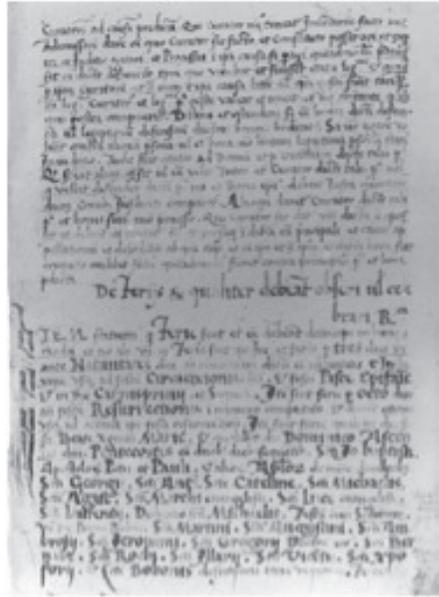


図2
ヴォゲラで1389年に制作され、1391年2月25日にジャンガレアツォ・ヴィスコンティに認可された『市民法ならびに刑法』：下から二行目に“Sancti Rochi”の文字を見て取ることができる



図3
ジョヴァンニ・ディ・パオロ
《聖グレゴリウスの聖天使城への行列》15世紀、
板に油、40.2 x 42.5cm、ルーヴル美術館、パリ



図4
ロレンツォ・モナコ
《キリストと聖母の執り成し》1402年以前、
カンヴァスにテンペラ、239.4 x 153 x 2.5 cm、
クロイスターズ美術館、ニューヨーク



図5
ベルギーノ
《神に嘆願する聖ロマヌスと聖ロクス》
15世紀末、フレスコ、186 x 128cm、
市立絵画館、デルータ



図6
ベノッツォ・ゴッツオリ
《聖トレンティーノのニコラウス、聖ロクス、
聖セバスティアヌス、聖シエナのベルナル
ディーノと跪く寄進者》1481年、
カンヴァスにテンペラ、78.7 x 61.9 cm、
メトロポリタン美術館、ニューヨーク



図7
《キリストの生誕（上部）、聖ロクスを描く
ゴットアルド（下部）》15世紀、フレスコ、
サンタンナ教会、ピアチェンツァ



図8
モレット・ダ・ブレージャ
《天使に癒される聖ロクス》1545年ごろ、
カンヴァスに油、西洋美術館、ブタペスト



図9
アントネッロ・ダ・メッシーナ
《聖セバスティアヌス》1475-77年、
板に油彩、171 x 85cm、
国立絵画館、ドレスデン

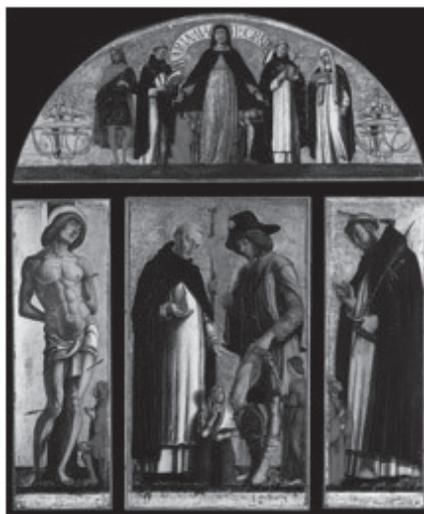


図10
アンドレア・ダ・ムラーノ《祭壇画》
1478年頃、板にテンペラ、152 x 88 cm（中央）、
152 x 47 cm（左右）、80 x 199 cm（ルネッタ）、
アカデミア美術館、ヴェネツィア



図 11
バルトロメオ・ヴィヴァリーニ
《聖ロクスと天使》1480年、
板絵、138 × 59 cm、
サンテウフェミア教会、ヴェネツィア



図 12
パッチョ・ディ・スピネッロ
《慈悲の聖母と聖ロレンティヌス、聖ペルゲンティヌス》1430年ごろ、
サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会、
アレツォ



図 13
バルトロメオ・デッラ・ガッタ
《慈悲の聖母に祈りを捧げるロクス》1479年頃、
板にテンペラ、215 × 115 cm、
中近世博物館、アレツォ

表1 聖人伝の基本情報と相違

	フランチェスコ・ディエド	ドメニコ・ダ・ヴィンチンツァ	匿名のドイツ人	《Acta Breviora》	ジャン・フェリボ	ジャンド・パン
刊行	1479-95(7版)	1478-80(1版)	1482-84(3版)	1483-85(2版)	1494-96(3版)	1516(1版)
言語	ラテン語(5版) イタリア語(2版)	イタリア語	ドイツ語	ラテン語	フランス語	ラテン語
出版地	ミラノ 79年 ミラノ 79年(伊語) ヴェネツィア 83/84年 ミラノ 84年(伊語) ニルンベルク 85年 マインツ 94/95年 パリ 85年	ミラノ	ウィーン 82年×2版 ニルンベルク 84年	ケルン 83年 ルーヴェン 85年	パリ 94年×2版 ルーアン 96年	ヴェネツィア
ロクスの出生地	モンペリエ 1295年(伊語版による)	モンペリエ	モンペリエ	モンペリエ	モンペリエ	モンペリエ
両親の名前	Giovanni, Libera	Giovanni, Libera	Giovanni, Libera	Giovanni, Libera	Giovanni, Franca	—, Franca
父親の肩書き	執政官のひとり	王家の血を引く貴族	騎士	王家の血を引く貴族	王家の血を引く貴族	裕福な市民
両親をなくした年齢	20歳	20歳	20歳	20歳, 15歳(ms.)	20歳	20歳
訪れた都市	アックアベンデンテ チェゼーナ ローマ — ガリア・トガータ — — ピアチエンツァ	アックアベンデンテ チェゼーナ ローマ リミニ — ローマニヤ M.トレヴィジアーナ ノヴァーラ — ピアチエンツァ	アックアベンデンテ チェゼーナ ローマ リミニ — — M.トレヴィジアーナ ノヴァーラ — ピアチエンツァ	アックアベンデンテ チェゼーナ ローマ リミニ — — — ノヴァーラ — ピアチエンツァ	アックアベンデンテ チェゼーナ ローマ リミニ — — — — — ピアチエンツァ	アックアベンデンテ チェゼーナ ローマ リミニ — — — — — ピアチエンツァ
施療院の院長名	ヴィンチエンツォ	ヴィンチエンツォ	ヴィンチエンツォ	ヴィンチエンツォ	ヴィンチエンツォ	ヴィンチエンツォ
ローマの秘権脚	イギリス人(羅語版) イギリス人大司教(伊語版)	イギリス人大司教、 アングレーラの秘権脚	イギリス人大司教	アングレーラの秘権脚	ブルターニュの生まれの者	ブルターニュの生まれの フランス人
ピアチエンツァの追隨者	ゴットアルド	ゴットアルド	ゴットアルド	ゴットアルド	ゴットアルド	ゴットアルド
没地	佛遊、フランスにある砦 1327	ドイツに向かう途中	ドイツに近い街 1327	アングレーラ(ドイツ)に向か う、 ロンバルディア(一地方)	ドイツの一地方	故郷
領主との血縁関係	父方のおじ	父方のおじ	従兄弟	父方のおじ	近親者	母方のおじ
コンスタンツの祈禱行列 (1414)	6月17日、22日 18日(伊語版)	—	—	—	7月24日	7月24日
奇蹟のあった土地	パリ、ピカルディーの街 (パリ、95年版)	—	—	—	パリ、ピカルディーの街	パリ、ピカルディーの街
信仰の地域	プロヴァンス(伊語版)	—	—	—	イタリア、ラングドック	—
聖遺物のある土地	ヴェネツィア(パリ、95語版)	—	—	—	ヴェネツィア	ヴェネツィア

Ascagni, Paolo. *San Rocco Pellegrino*. Marcianum Press: Venezia, 2007. 42頁記載の表を訳出

参考文献

一次文献

« Acta Breviora » Lovinio, *Historie plurimorum sanctorum*, Johannes de Westfalia, 1485, fol.300-303, Biblioteca Reale del Belgio, Bruxelles, incunabolo B 1483. Copinger 6434, BHL 7275. (http://www.sanroccodimontpellier.it/pdf_archivio/agiografie/6_auctore_anonymo.pdf, 2016年3月3日閲覧)

Acta Sanctorum, 08, Augustii, Tomus, 03, 1737. (http://www.documentacatholicaomnia.eu/20vs/202_Acta_Sanctorum/1643-1925._Societe_des_Bollandistes._Acta_Sanctorum_08_Augustii_Tomus_03_1737_LT.pdf, 2016年3月3日閲覧)

Diedo, Francesco, *La Vita de Sancto Rocco*, Milano, Simon Magniacus, 1479, 4, 20 fol., 25 linee, tip. I:99 R Museo di Chantilly. Copinger n. 1974. BMC VI 760. IA 26 598. (http://www.sanroccodimontpellier.it/pdf_archivio/agiografie/2_diedo_italiano.pdf, 2016年3月3日閲覧)

Domenico da Vicenza, *Istoria di san Rocho*, Milano, Leonhard pachel et Ulrich Scinzenzeller, 1478/80, 4, 6fol., a6, 44linee, tip 2: 80G, IGI 3529 Milano, Biblioteca Antoniana, ms. 220, sec. XV, f.197v-214. BAI pp.620-621. (http://www.sanroccodimontpellier.it/pdf_archivio/agiografie/3_domenico_da_vicenza.pdf, 2016

年 3 月 3 日閲覧).

Vasari. Giorgio, “Don Bartolomeo abate di San Cremente”, *Le vite de' più eccellenti architetti, pittori, et scultori italiani, da Cimabue insino a' tempi nostri. Nell'edizione per i tipi di Lorenzo Torrentino, Firenze 1550*, (a cura di) Luciano Bellosi e Aldo Rossi., Einaudi, Torino 1986.

ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説 1-4』前田敬作・今村孝訳、平凡社、2006 年

二次文献

Ascagni. Paolo, *San Rocco contro la malattia : storia di un taumaturgo*, San Paolo : Cinisello Balsamo (Milano), 1997.

Id., *San Rocco Pellegrino*, Marcianum Press: Venezia, 2007.

Bailey. Gauvin A (et al), *Hope and Healing: Painting In Italy In A Time Of Plague, 1500-1800*, Worcester Art Museum; Massachusetts, 2005.

Bertelli. Carlo (et al.), *San Rocco nell'arte: un pellegrino sulla Via Francigena*, Electa :Milano, 2000.

Bessodes. Maurice, *Saint Roch: Histoire et légends*. Ed. du Bon-labeur.: Montpellier, 1931.

Boeckl. Christine M, *Images of Plague and Pestilence*, Truman State University Press; Kirksville, 2000.

Bolle. Pierre, “Saint Roch, Une Question de Méthodologie”, *San Rocco: Genesi e prima espansione di un culto Incontro di studio--Padova, 12-13 febbraio 2004*, Société des Bollandistes; Bruxelles, 2006, pp.9-56.

Carpentier. Elithabeth, “ Autour de la peste noire : Famines et épidémies dans l'histoire du XIVE siècle”, *Annales ESC*, 1962, no 6, pp.1062-92.

Fliche. Augustin, “Le problème de Saint Roch”, *Analecta Bollandiana*, no. 68, 1950, pp. 343-361.

Fornasari. Liletta (et al.), *Il Quattrocento : arte in terra d'Arezzo*. Edifir ; Firenze, 2008.

Humfrey. Peter, “Competitive Devotions: The Venetian Scuole Piccole as Donors of Altarpieces in the Years around 1500”, *The Art Bulletin*, Vol. LXX, no.3, 1988, pp.401-423.

Little. Lester K (ed), *Plague and the End of Antiquity: The Pandemic of 511-750*. Cambridge University Press: New York, 2006.

Marshall. Louise, “Manupulating the Sacred: Image and Plague in Renaissance Italy”, *Renaissance Quarterly*, vol.47, no.3, 1993, p.485-532.

Maurino. Antonio, *San Rocco di Montpellier*, Confronti storici: Torino, 1936.

Meersseman. Gilles Gerard, *Ordo Fraternalitatis. Confraternite e pietà dei laici nel*

- Medioevo*, vol. II: Roma, 1977, pp. 954 - 971, 972, 997-998, 1011, 1015 - 1029.
- Tonon. Franco, *Scuola dei battuti di San Rocco: Documenti sulle origini e illustrazione dei Capitoli delle Mariegole*, Quaderni della Scuola grande Arciconfraternita di San Rocco ; Venezia. 1998.
- Wisch. Barbara (et al.), *Confraternities and the visual arts in Renaissance Italy : ritual, spectacle, image*, Cambridge University Press; Cambridge & New York, 2000.
- Worcester. Thomas, "Saint Roch vs. Plague, Famine, and Fear", in Franco Mormando & Thomas Worcester (ed.), *Piety and Plague: From Byzantium to the Baroque*, Truman State Univ Press: Kirksville, 2007.
- Vaslef. Irene, *The role of St. Roch as a plague saint: a late medieval hagiographic tradition*, Thesis of Ph. D., Catholic University of America, 1984.
- Vauchez. André, *Sainthood in the later Middle Ages*, Cambridge University Press: Cambridge, 2005.
- Id., "Rocco", in *Bibliotheca Sanctorum*, vol. XI, Roma, 1968, pp. 264-274.
- Vauchez. André (et al.), *San Rocco: Genesi e prima espansione di un culto Incontro di studio--Padova, 12-13 febbraio 2004*, Société des Bollandistes; Bollandistes, 2006.
- 石坂尚武「イタリアの黒死病関係史料集(一)～(五)」『人文學』、174、176、179、180、181号、2003、2004、2006、2007、2007年、同志社大学人文学会、22-73頁、26-83頁、139-236頁、135-176頁、97-147頁
- 同「中世カトリシズムによる黒死病の受容」『文化史学』、56号、2000年、文化史学会、53-82頁
- 岡田温司『ミメシスを超えて——美術史の無意識を問う』勁草出版、2000年
- 米田潔弘「ヴェネツィアのスクオーラ・グランデの美術と音楽——サン・ロッコを中心に——」『桐朋学園大学研究紀要』、26号、2000年、67-89頁

La Ferita sulla Coscia: La Diffusione del Culto di San Rocco nella fine del Quattrocento in Italia

Jun KAWADA

In questo saggio, viene ricercata la diffusione del culto di San Rocco durante la fine del quattrocento in Italia.

S. Rocco è il santo ritenuto, soprattutto in Italia, Francia e Germania, protettore degli ammalati, dei pellegrini e dei becchini. Si presume che il culto ebbe origine alla fine del trecento, si radicò nel popolo durante il secolo e si estese rapidamente, a partire da Venezia, a seguito della peste di fine quattrocento.

Ricordiamo l'episodio fondamentale della vita del santo: Rocco da Montpellier, durante il suo pellegrinaggio, curò molti malati di peste e, a metà percorso, se ne ammalò. Tuttavia, ritornato a casa, guarì miracolosamente. In seguito fu arrestato come spia e morì da qualche parte. Gli agiografi presero in prestito i topoi di altri santi e aggiunsero a quell'episodio molti altri, per dipingere il nuovo santo come un'uomo ideale e al tempo stesso reale. Tra le tante opere sulla vita, quella di Francesco Diedo (1479) lasciò una grande influenza ai posteriori.

Alla figura di S. Rocco si attribuisce un mantelletto, gambali, berretto e un bastone: il tipico abito di un pellegrino. Qualche volta viene rappresentato con una conchiglia, zucca lunga, borsellino sulla spalla e un cane. Benché questi siano attributi comuni anche a San Giacomo, uno in particolare rimane esclusivo di S. Rocco: la ferita sulla coscia come segno dell'operazione chirurgica per la peste.

Infine, a partire dalla seconda metà del Quattrocento, tanti ospedali furono fondati dalle confraternite che, per lodare e incentivare alle opere di misericordia, commissionarono molte figure del santo, visto non solo come un curatore miracoloso, ma anche come un modello concreto per tutti i fratelli.